

國學院大學學術情報リポジトリ

Process and context of "Dogo" attaching legs in late Jomon period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 昭典 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001992

縄文時代後期前葉における土偶の有脚化とその意義

—東北地方北部を中心として—

阿部 昭 典

要旨

縄文時代後期前葉（十腰内I式期）の東北地方北部では、東日本のなかでも遅れて土偶が有脚化する。この地域の土偶の有脚化について、中期末葉から後期前葉の土偶形態の変遷を整理した。東北地方における土偶は、中期末葉に極端に減少し、土偶やそれに関わる儀礼行為が縄文時代を通じて連綿と行われていたわけではないことを示している。後期前葉は減少した土偶が再び増加する時期にあたり、これに伴うように他の土製品や石製品等の「第二の道具」も多様化する。

本論では、後期前葉における土偶の有脚化の過程について、帰属時期が比較的判別できる遺構出土資料を中心に検討した。その結果、従来から指摘されてはいたが、十腰内I式後半期に有脚立像土偶が成立することを確認した。また東北地方北部の有脚立像土偶の出現は、用途や安置方法などの変化を伴う可能性もあるが、東北地方南部のハート形土偶の影響が大きかったと推測される。加えて、中期末葉から後期前葉まで見られる肩部貫通孔の検討から、紐を通して懸垂して使用していた可能性が想定される。

キーワード

十腰内I式期、頸長土偶、有脚立像土偶、ハート形土偶、折衷土偶、携帯型

1. はじめに

縄文時代の土偶は、いわゆる「第二の道具」(小林1977)のなかの代表的土製品であり、「護符」や「地母神」、「女神」、「精霊」といった性格づけがなされている。土偶の出現は草創期末まで遡り、地域によって形態的变化を伴い、土偶が一時的に消滅(減少)する時期がある。今回対象とする東北地方北部の土偶は、後期前葉以降に有脚化するが、東日本のなかでは有脚立像土偶の定着が最も遅い地域である。中部高地や北陸地方などでは、少なくとも中期初頭には中空土偶とともに有脚立像土偶が出現する。この有脚化の現象は、土偶形式変遷の重要な画期として評価され(谷口1990、原田2009、ほか)、土偶変遷史の中で重要な意味を有していると考えられる。

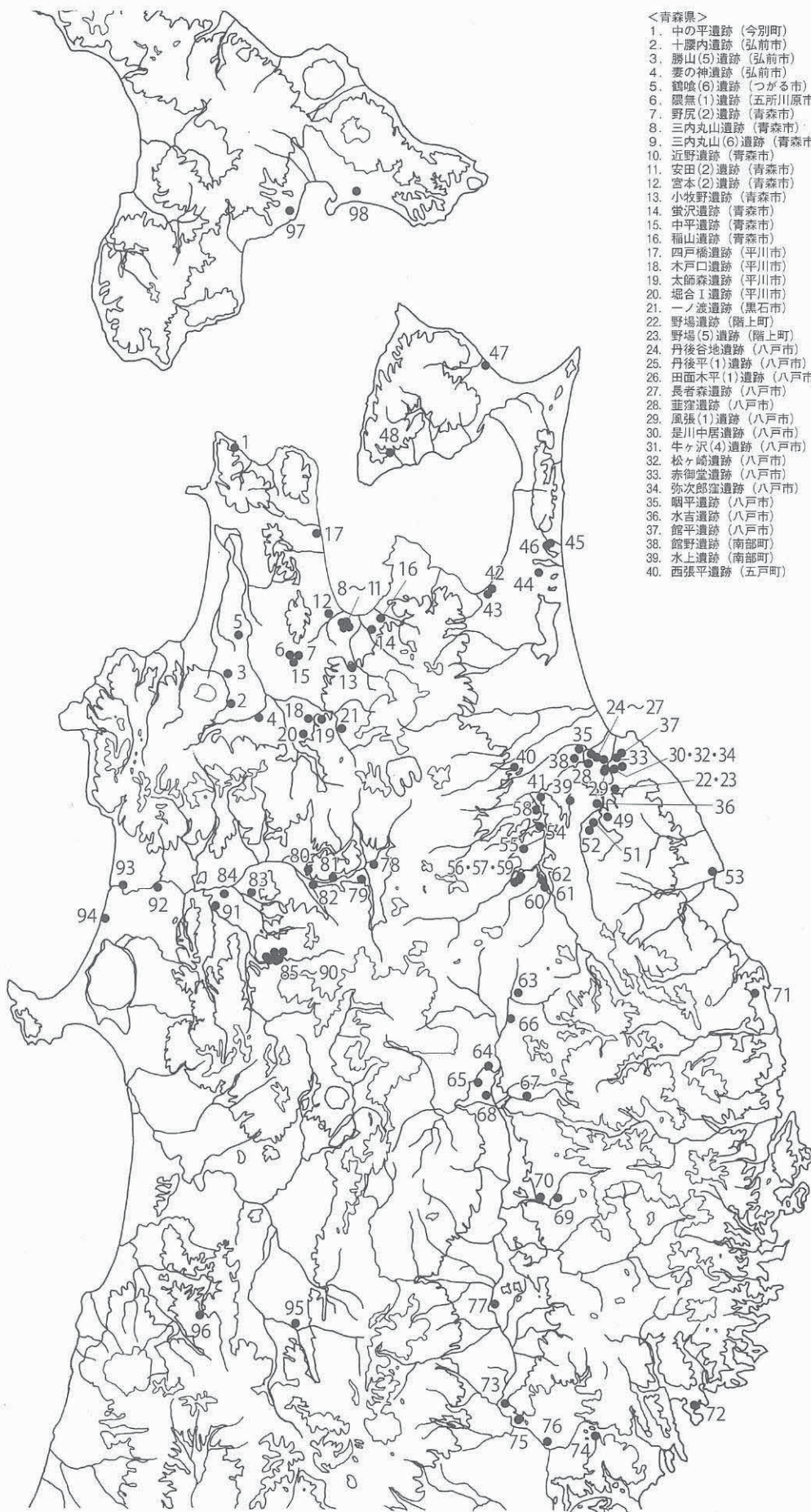
土偶を含めた「第二の道具」の研究は、縄文時代における人々の信仰やコスモロジーを解明する上で重要であり、少なからず彼らの行動に非常に大きな影響を及ぼしていたことは間違いない。土偶変遷史のなかでも有脚化の意義は大きく、使用・安置方法の問題とともに、故意破壊説を検証するうえでも重要な画期として捉えられる。

東北地方北部の後期前葉土偶の特色は、逆三角形の胴部と格子目状の文様、鳩尾から腹部の三角形の

窪みなどであり、十腰内I式土器と類似した分布域を持つ(第1図)。東北地方南部から中部(宮城県)にかけてはハート形土偶が広がり、一部分布域が重なり、両者の折衷土偶も確認される⁽¹⁾。

これらの後期前葉の土偶は、葛西勳(1986)や成田滋彦(1999・2002a・2002b・2002c・2007・2008)、鈴木克彦(1999b)、上野修一(1997)、小笠原雅行(2005)、中村良幸(1999)によって編年や製作技術研究など、精力的に研究が行われている。しかしながら、本土偶の名称は、「頸長土偶」(鈴木1981・1999a)、「首長土偶」(小笠原2005)、「十腰内土偶」(成田2008)などと呼称されたり、ハート形形式の一つとして捉えられることもある(植木1990)。これらの土偶型式は、永峯光一(1977)が言うように、代表的な後期土偶型式の陰で“目立たない土偶”であったためか、適切な名称が付けられなかった。そのことが研究上の一つの障害となっており、共通認識可能な命名が望まれる。

以前、当該期の土偶形態の有脚化について言及したが(阿部2009)、「第二の道具」の多様化に論点を置いたため、肝心の十腰内I式期の土偶有脚化の過程への理解が不十分であった。本論では、従来の土偶編年研究の成果と課題を整理し、東北地方北部に



<青森県>

1. 中の平遺跡 (今別町)
2. 十腰内遺跡 (弘前市)
3. 勝山(5)遺跡 (弘前市)
4. 妻の神遺跡 (弘前市)
5. 鶴喰(6)遺跡 (つがる市)
6. 震無(1)遺跡 (五所川原市)
7. 野尻(2)遺跡 (青森市)
8. 三内丸山遺跡 (青森市)
9. 三内丸山(6)遺跡 (青森市)
10. 近野遺跡 (青森市)
11. 安田(2)遺跡 (青森市)
12. 宮本(2)遺跡 (青森市)
13. 小牧野遺跡 (青森市)
14. 堂沢遺跡 (青森市)
15. 中平遺跡 (青森市)
16. 福山遺跡 (青森市)
17. 四戸橋遺跡 (平川市)
18. 木戸口遺跡 (平川市)
19. 太師森遺跡 (平川市)
20. 堀合I遺跡 (平川市)
21. 一ノ波遺跡 (黒石市)
22. 野場遺跡 (階上町)
23. 野場(5)遺跡 (階上町)
24. 丹後谷地遺跡 (八戸市)
25. 丹後平(1)遺跡 (八戸市)
26. 田面木平(1)遺跡 (八戸市)
27. 長者森遺跡 (八戸市)
28. 窪窪遺跡 (八戸市)
29. 風張(1)遺跡 (八戸市)
30. 是川中居遺跡 (八戸市)
31. 牛ヶ沢(4)遺跡 (八戸市)
32. 松ヶ崎遺跡 (八戸市)
33. 赤御堂遺跡 (八戸市)
34. 弥次郎堂遺跡 (八戸市)
35. 嶋平遺跡 (八戸市)
36. 水吉遺跡 (八戸市)
37. 館平遺跡 (八戸市)
38. 館野遺跡 (南部町)
39. 水上遺跡 (南部町)
40. 西張平遺跡 (五戸町)

<岩手県>

41. 泉山遺跡 (三戸町)
42. 有戸島井平(4)遺跡 (野辺地町)
43. 有戸島井平(7)遺跡 (野辺地町)
44. 千蔵(13)遺跡 (六ヶ所村)
45. 大石平遺跡 (六ヶ所村)
46. 上尾駈(2)遺跡 (六ヶ所村)
47. 水木沢遺跡 (むつ市)
48. 田ノ沢遺跡 (むつ市)
49. 長倉I遺跡 (軽米町)
50. 大日向II遺跡 (軽米町)
51. 君成田IV遺跡 (軽米町)
52. 駒板遺跡 (軽米町)
53. 麦生III遺跡 (久慈市)
54. 川口I遺跡 (二戸市)
55. 寺久保遺跡 (二戸市)
56. 馬立I遺跡 (二戸市)
57. 馬立II遺跡 (二戸市)
58. 家ノ上遺跡 (二戸市)
59. 青ノ久保遺跡 (二戸市)
60. 親久保II遺跡 (一戸町)
61. 仁昌寺遺跡 (一戸町)
62. 大平遺跡 (一戸町)
63. 秋浦II遺跡 (岩手町)
64. 湯舟遺跡 (滝沢村)
65. 外久保遺跡 (滝沢村)
66. 芦名沢II遺跡 (盛岡市)
67. 上米内遺跡 (盛岡市)
68. 大新町遺跡 (盛岡市)
69. 立石遺跡 (花巻市)
70. 観音堂遺跡 (花巻市)
71. 館石野I遺跡 (田野畑村)
72. 門前貝塚 (陸前高田市)
73. 新山権現社遺跡 (平泉市)
74. 清田台遺跡 (一関市)
75. 清水遺跡 (一関市)
76. 河崎の棚敷地 (一関市)
77. 大文字遺跡 (奥州市)

<秋田県>

78. 大湯環状列石 (鹿角市)
79. 高屋館跡 (鹿角市)
80. 塚ノ下遺跡 (大館市)
81. 萩神遺跡 (大館市)
82. 横沢遺跡 (大館市)
83. 藤株遺跡 (北秋田市)
84. 伊勢堂遺跡 (北秋田市)
85. 橋場袋A遺跡 (北秋田市)
86. 砕洲遺跡 (北秋田市)
87. 桐内D遺跡 (北秋田市)
88. 二重島A遺跡 (北秋田市)
89. 二重島C遺跡 (北秋田市)
90. 日廻袋B遺跡 (北秋田市)
91. 小袋袋遺跡 (北秋田市)
92. 竜毛沢館遺跡 (能代市)
93. 真壁地遺跡 (能代市)
94. 萱刈沢I遺跡 (三種町)
95. 八木遺跡 (横手市)
96. 片符沢遺跡I (由利本庄市)

<北海道>

97. 館野遺跡 (北斗市)
98. 石倉貝塚 (函館市)

第1図 十腰内I式期の土偶分布図

における土偶有脚化とその意義について検討を加えたい。

2. 東北地方の後期前葉土偶の編年研究

東北地方北部の後期前葉の土偶形態に関する初期の記述は、青森県内の十腰内遺跡や近野遺跡の報告書などに認められる。弘前市十腰内遺跡（今井・磯崎1969）の報告では、第Ⅰ群土器に伴う土偶について、沈線によって格子目状の文様を表現することが多く、体部が逆二等辺三角形に近い土偶は円筒土器以来の伝統をひくことを指摘している。また東北地方では長期間にわたって板状土偶ともいうべき手足の表現のない形態が続いたことに言及する。貫通孔に関しても、物にかけたか人体に下げたかはっきりしないが、紐を通して懸垂したものであると推測する。青森市近野遺跡の報告書では、成田滋彦（1977）が十腰内Ⅰ式土器群に伴う土偶として、第一類～第三類に分類している。第三類について、「土偶の形態が板状から脱皮し、立体化へと発展する過渡的様相を示しているものと思われ」、特徴を「長頸、長胴、短足、〇脚」型であると説明する。また格子目状の文様について、「植物を編んでつくった『むしろ』状の衣類を想像させる」と指摘する。

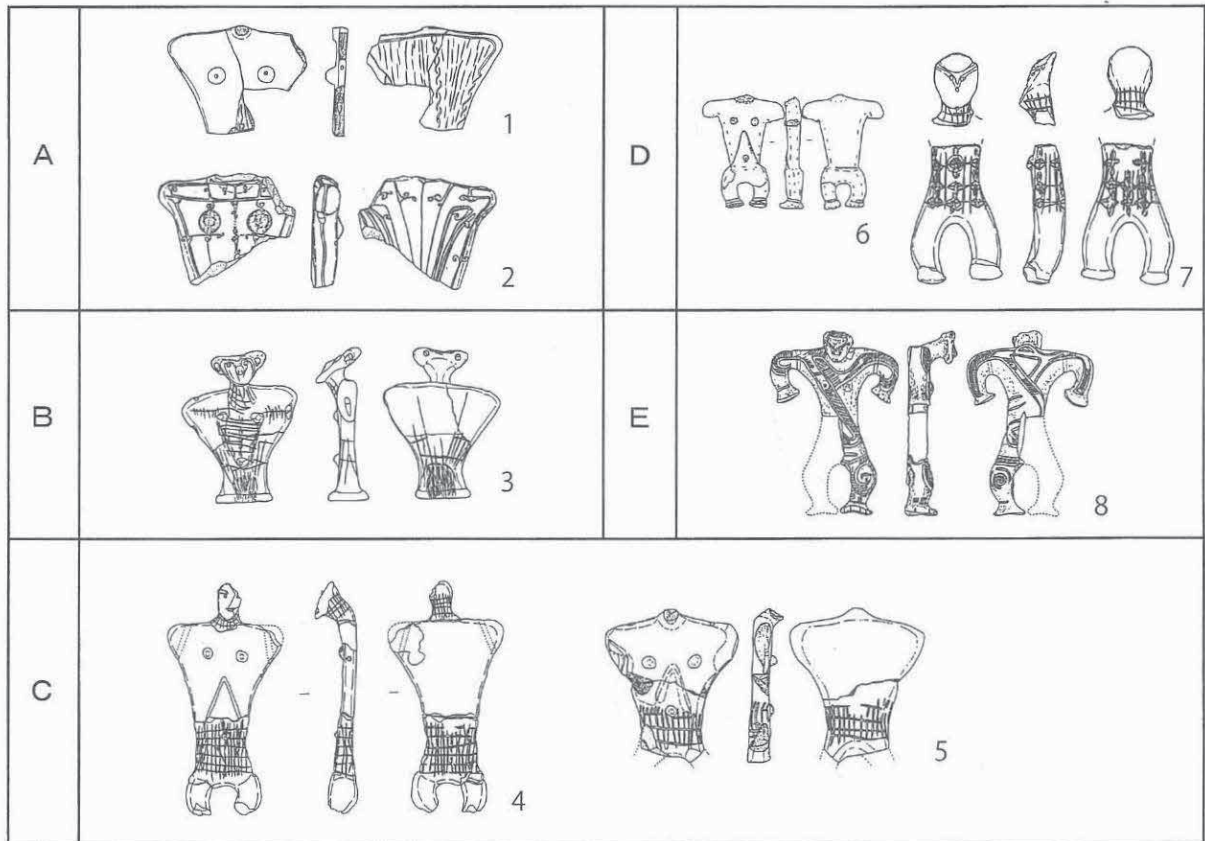
また小野美代子（1984）は、日本列島の土偶変遷を概説するなかで、東北地方北半の土偶は後期初頭まで中期板状土偶の伝統を残す無脚土偶であるのに対して、中葉にかけて有脚土偶へと変化することを概略的に説明する。

一方、十腰内Ⅰ式期の土偶について、本格的に編年研究を行ったのが葛西勳（1986）である。葛西は、土器編年をもとに当該期の土偶をA～Eの5段階変遷を想定し、「あたかも卵から孵ったおたまじゃくしが親の蛙の姿に変遷していく過程に似ている」と評価する（第2図）。各段階の特色を要約すると、A段階の特徴は、体部が逆三角形で、肩は水平となり、腕部や脚部は全く表現されない。鳩尾から腹部にかけて三角形のくぼみを持つ。文様は、縦横の沈線による格子目文を施し、連鎖状の沈線などが施される。B段階は、上半身はA段階と同様で、脚部が台形状に広がる立像になり、腕部は未発達で肩部に穿孔を有する。文様は、格子目状の沈線文を施し、連鎖状の文様も見られる。C段階は、両脚が出現し、

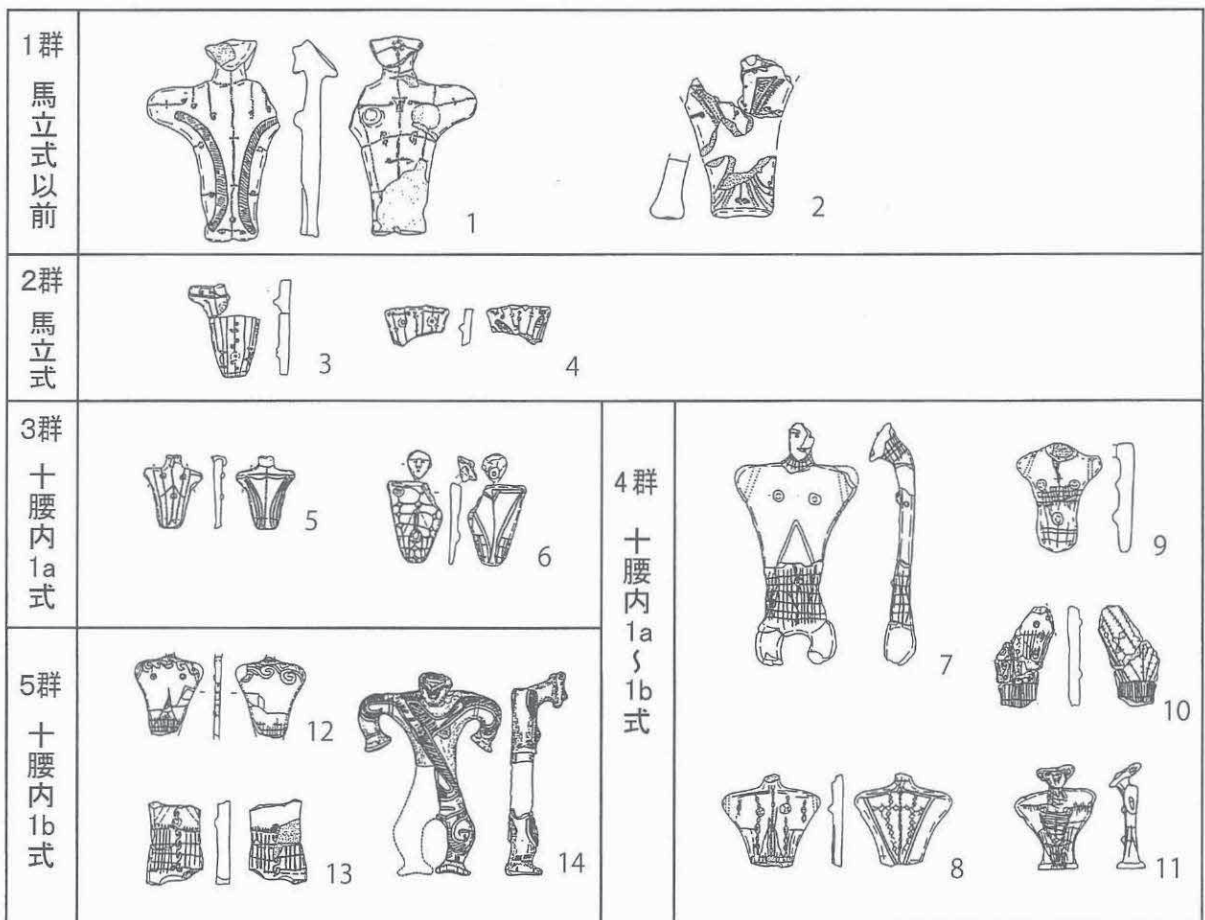
短足「〇」脚で、立像としては不安定である。腕部は表現されずに肩部の穿孔を持つ。また腹部には鳩尾からくぼみを有する。文様は、下腹部等に格子目文を施し、連鎖状文を伴う。D段階は、ようやく腕が表現されて垂れ下がり、立像化して体部が板状から丸みを帯びてくる。脚部は、前段階同様に短足「〇」脚である。E段階は、施文に縄文が用いられることも新たな要素であり、鳩尾から腹部にかけて三角形のくぼみがなくなり、肩部の穿孔も残るものもある。また葛西は、土偶形態の変化について「内部的な変革」と「外的文化の刺激・影響」とともに土偶の機能・用途の変化にも留意する必要性を説いたうえで、関東地方からの加曾利B式文化の北上につれて変容し、板状から立像化していったことを指摘する。土器編年にそって無脚から有脚へと変化する過程を明らかにしたことは評価されるが、一系統的に有脚化・有腕化するという点の妥当性と、鳩尾からのくぼみがA段階から存在するという点に関しては疑問が残り、検証を要する。

成田滋彦（1999）は、永峯の説明から「目立たない土偶」と呼称し、土偶の形態と文様を詳細に分類して中期末葉・十腰内Ⅰ式以前・十腰内Ⅰ式期にわけて特色を説明する。大木10式並行期は、一本松遺跡出土土偶などを挙げて、両腕を広げた十字形を呈するもので、円筒上層期の形態を継承したものであるとする。文様は、刺突を用いた列状施文を主体として、沈線による渦巻文を伴う。一方、十腰内Ⅰ式以前の土偶は、野場(5)遺跡などを例に挙げて、両手を広げた無脚土偶A類型が主体であり、中期末葉の形態を継承していると指摘する。この段階の文様は、刺突を列状と格子状に施文したもので、刺突が主体の文様構成である。十腰内Ⅰ式の土偶は爆発的に増加して、形態と文様に多様性が見られる時期であり、A類型の無脚土偶とB類型の立脚土偶が見られると指摘する。この段階の文様は、格子目文を主体として、磨消縄文は少なく、簡略化した土偶が出現すると説明する。無脚と立脚が併存するかという点については不明であり、今後の課題としている。

鈴木克彦（1999b）は、「頸長土偶」の名称を用いて、縄文後期の土偶を11群に分類し、最後の一群を含めて11段階変遷を示している（第3図）。この中で後期前半期は、①後期1群（馬立式相当以前）、



第2図 土偶変遷図1 (葛西1986より作成)



第3図 土偶変遷図2 (鈴木1999bより作成)

②後期2群(馬立式相当)、③後期3群(十腰内1a式相当期)、④後期4群(十腰内1a,1b式相当期)、⑤後期5群(十腰内1b式相当期)の4段階変遷となる。各段階の特色を要約すると、後期1群は、野場(5)遺跡出土土偶などがあり、連続刺突列による施文で、一端に横S字のリボン文様や末端に「の」の字渦文を施すなどの特色がある。後期2群の特色は、横S字のリボン文様や「の」の字渦文、格子目状沈線文である。後期3群の特色は、首ないし頭部が前に突き出た所謂頸長土偶で、眉と鼻が隆線文で一体に造作され、目・口が刺突で施される。後期4群は、十腰内1a・1b式のどちらに帰属させるか判断を決めかねるものを便宜的に4群としている。後期5群は、秋田県萱刈沢I遺跡や青森県近野遺跡出土土偶などを挙げる。各段階の特色はあまり明示されていないが、共伴する土器型式に基づく土偶編年という手法は追認されるべきであろう。

小笠原雅行(2005)は、青森市三内丸山(6)遺跡の出土土偶について再検討を加え、葛西・鈴木の土偶編年を参考に三内丸山(6)遺跡の土偶について十腰内I式のなかでも前半を中心とするものと評価する。また連続刺突文を持つ土偶を、鈴木が言う「馬立式以前」に位置づけている。小笠原は、近接する近野遺跡について、十腰内I式後半の土器が多いことから三内丸山(6)遺跡と時間差があり、前に突き出した頭や二脚表現が一般的になる点を相違点として挙げるなど、重要な指摘をしている。

編年研究の問題点は、やはり無脚から有脚へと一系統的に変遷するのかどうかという点であり、これらの形態変化がいかなる要因であるかという問題に集約されるだろう。本論では、後期土偶成立以前の中期末葉の土偶形態の地域性を概観した後、後期初頭から前葉の土偶形態の変遷について、遺構内共伴資料を中心に検討したい⁽²⁾。

3. 中期末葉の土偶形態

ここでは中期末葉の東北地方の土偶形態について概観し、後期土偶成立過程を考える上での参考としたい。当該期の土偶については、「土偶とその情報」研究会による一連の集成作業と研究や上野修一(1997)、鈴木克彦(1999a)などの論考があるが、東日本では中期末葉に土偶が衰退することが指摘さ

れている。中期末葉に関しては、大木9式期は二細分、大木10式期は三細分とする(阿部2007・2008)。

1) 東北地方南部の土偶

東北地方南部(宮城・山形・福島)の中期末葉は、複式炉が隆盛する一方で、土偶は極端に減少し、新潟ではほぼ途絶える。この時期の土偶は無脚ではあるが、チェスピース状に安定して立つ(第4図)。この時期の特色は、刺突列とともに胴部のY字状正中線である。

福島県の土偶は、山内幹夫(1992)や角田学(1995)などが変遷をまとめており、中期末葉の土偶は十字形を呈する無脚土偶にY字状の正中線を有するのが特色である(第4図1~6)。1は福島市月崎A遺跡(伊藤・八巻1968)出土土偶で、「月崎A・第1系列」(上野1997)などと呼称される。これらの土偶は伊藤玄三と八巻正文(1968)によって特色がまとめられ、奴風状を呈する板状土偶で、すでに肩部に貫通孔が認められる。胴部文様は、正面には隆線によるY字状正中線とその周囲に同心円文や鉤の手状文(5字状文)・三角形文、背面に側縁部の対弧線文が沈線によって描かれる。帰属時期は大木9式期と考えられる。第4図2~7は大木10式期の土偶形態であると考えられる。3・5~7は隆帯によるY字状正中線を有し、正中線に沿って刺突文が施される。2~4は背面に円形や隅丸方形の懸垂文が縦位もしくは十字状に描かれる。この時期になると、刺突列が文様要素の主体となり、5・6は刺突列により背面に十字もしくは格子目状の文様を施す。本宮町高木遺跡(大河原ほか2003)の無脚土偶は、逆三角形の胴部に縄文を施す(7)。胸部から腹部は二つの乳房状の貼付文が付されるのみでほぼ無文になり、背面には三角形区画に横位沈線文やJ字文・S字文が描かれる。高木遺跡例はY字状正中線を持たない点など中期末葉の土偶と異なる特色を有しており、帰属時期が一段階新しくなる可能性を残す。

宮城県の土偶は、藤沼邦彦(1992)などが特色をまとめているが、全体的に中期末葉の事例が少ない(第4図8~10)。主な土偶は、大衡村上深沢遺跡(後藤ほか1978)や七ヶ宿町大梁川遺跡(相原ほか1988)、などがある。藤沼が指摘するように、大木9式期と大木10式期では土偶形態にあまり変化が見られない。形態的には、十字形もしくは腕部の幅が



1: 月崎A(福島), 2: 法正尻(福島), 3: 仲平(福島), 4: 和台(福島), 5: 小田口D(福島), 6: 上納豆内(福島), 7: 高木(福島),
 8: 上深沢(宮城), 9・10: 大梁川(宮城), 11: 山居(山形), 12・13: 山形西高敷地内(山形), 14: 立泉川(山形)



第4図 東北地方南部の中期末葉の土偶

広くなる奴舩形を呈する無脚立像土偶である。8は上深沢遺跡出土の大木9式期の土偶で、地文に縄文に沈線で腕部に横線文、胴部に縦位の沈線文を施す。大梁川遺跡の出土土偶(9・10)は、大木10式期に帰属すると考えられ、地文縄文を施さずに乳房に連結するY字状の正中線を持つのが特徴である。胴部には横方向の沈線文を施すものや、背面に方形文や弧線文が描かれる。また上野(1997)により「上深沢系列」や「大梁川系列」が設定されている。

山形県の土偶は、阿部昭彦(1994)や岩崎義信(2009)により事例集成とともに特色が示されている。11は西川町山居遺跡(氏家・志田1998)出土の大形土偶で、胴部にY字状正中線はないものの、地文縄文に三角形文・渦巻文などが見られる。これらの特色から大木9式期に帰属すると考えられる。頭部は平坦で、逆三角形の顔に隆帯で眉と鼻が表現される。また腕部には縦位の貫通孔を有する。12~14は、大木10式期の土偶である。12・13は山形市山形西高敷地内遺跡(佐藤庄・佐藤正1992)の土偶で、12は頭部や腕部を欠損するが、すでに脚部を有する点が注目される。正面の沈線文は不明瞭であるが、背面に縦位に配列する方形文は2~4の土偶に共通する。13は正中線に一本の沈線文と対弧状の平行沈線文が施される。背面には大木10式土器中段階~新段階に特徴的な微隆起線文によって玉抱文が描かれる。14は新庄市立泉川遺跡(佐竹ほか2002)出土の土偶で、頭部と脚部を欠損するが、無脚土偶になると推定される。胴部正面にはワラビ手状の沈線文などが描かれる。前段階にも見られた腕部の縦位の貫通孔を伴い、下部はやや外側に開く。背面には体部輪郭に沿って対弧状の平行沈線文が描かれる。

東北地方南部の土偶は、それほど数が多くないものの、大木9式期から大木10式期への土偶形態の変遷を追うことが可能である。大木9式期~大木10式期を通して見られるY字状正中線は、最大の特色である。また大木10式期後半には、土偶背面に縦位や十字状に円形文や方形文が施されるものも目立ち、これらも地域性を示していると言えるだろう。

2) 東北地方北部の土偶

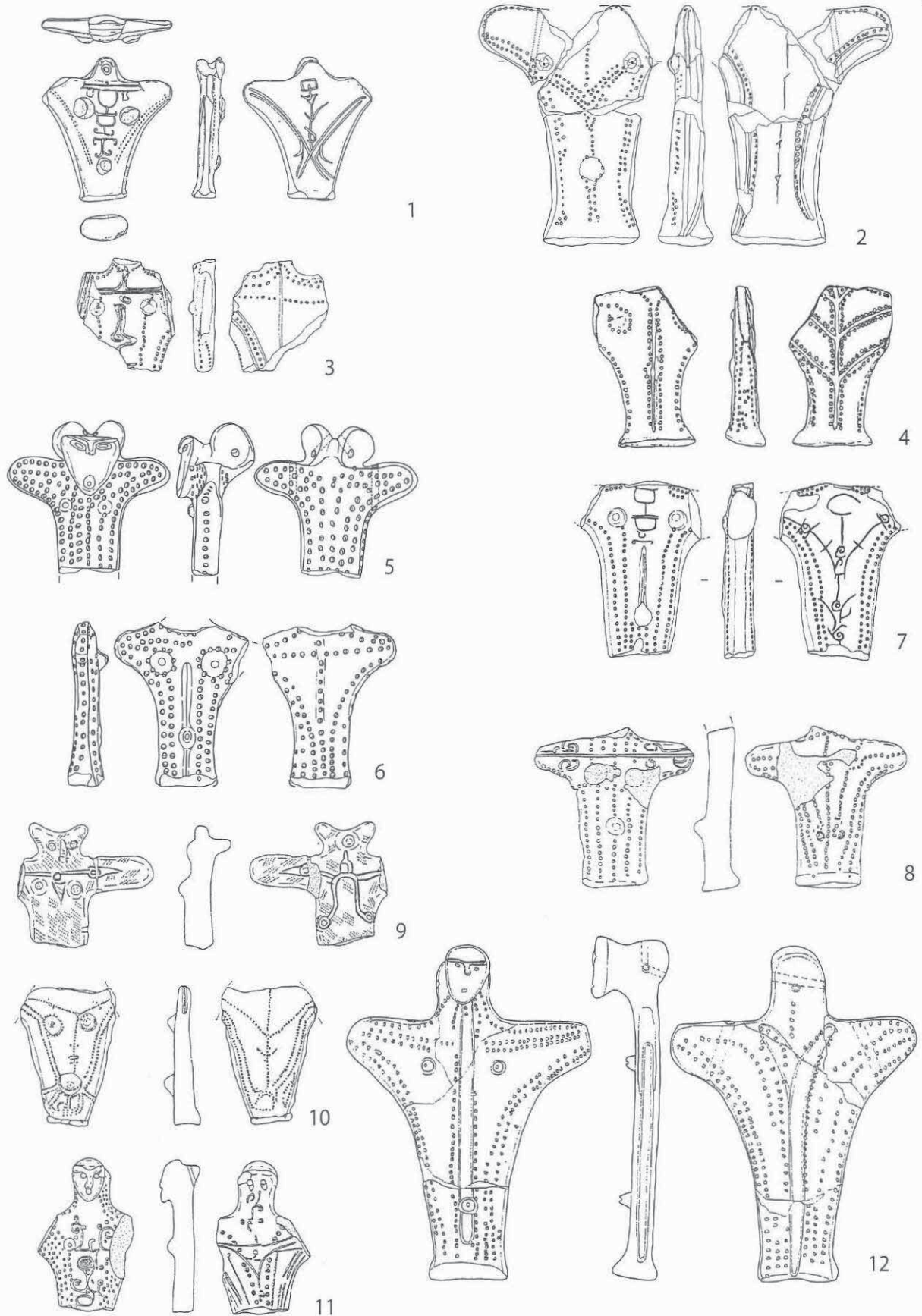
東北地方北部(青森・秋田・岩手)は、複式炉の一種である前庭部付石組炉が造営されるなど住居跡数や集落数が増大するが(阿部2008)、その反面、

土偶が極端に減少し、1遺跡で1点出土する程度である。形態的にはチェスピース状を呈する十字形土偶が多く、東北地方南部に類似するが、文様はY字状の正中線が見られず、刺突列が数列施されるなどの地域的差異が見られる。

秋田県内の土偶は、富樫泰時と武藤祐浩(1992)などがまとめているが、やはり事例は極端に少ない。大館市本道端遺跡(田村・本間1986)や鹿角市天戸森遺跡(秋元ほか1984)出土土偶などがある(第5図1~3)。この時期の土偶は、十字形を呈する無脚立像土偶であり、乳房と臍部分に貼付文を施す。大木9式期の明瞭な事例は乏しいが、大木10式期に帰属すると考えられる土偶は十字形を呈する無脚土偶で、肩部に貫通孔を有するものが多い(1~3)。正面には、乳房と臍の貼付文と体部輪郭に沿った刺突列と、正中線は刺突列か沈線文によって表現される。背面には対弧状の平行沈線文や隆線と刺突列によって表出されるものがある。これらは伴出土器は不明であるが、大木10式後半期もしくはその直後段階に位置付けられる可能性がある。

岩手県内の土偶は、奥州市五十瀬神社前遺跡(菅原1979)や盛岡市湯沢遺跡(三浦1983)、一関市清水遺跡(村上2002)等の資料がある。これらは十字形を呈する無脚土偶で、文様は刺突列を特徴とする。正面には、隆帯による正中線と乳房・臍状の貼付文を付けて、両側に縦位の刺突列が施される(第5図4~7)。5の顔は、逆三角形を呈し、大きな耳状の装飾が後頭部に貼り付けられる。背面には樹木状の文様が隆帯と刺突列や沈線文によって描かれるものがある(4・7)。これらは上野(1997)により「長者森家列」や「湯沢・第一系列」などと呼称される一群であり、大木10式期に帰属し、そのなかでも中段階から新段階に位置づけられると考えられる。

青森県内の中期末葉の土偶も極めて少なく、ここで取り上げる土偶も後期初頭⁽³⁾に帰属する可能性がある(第5図8~12)。8はむつ市最花遺跡出土の土偶で、地文縄文に描かれる同心円文や三角形文は月崎A遺跡出土土偶と共通性が見られることから、最花式期に帰属する可能性がある。9~12は正面・背面ともに刺突列で装飾し、11は正中線部分に渦巻文やワラビ手状の沈線文を描く。また深浦町一本松遺跡(新谷・桜井ほか1980、成田1997)や鱒ヶ沢町



1: 本道端(秋田), 2: 家の下(秋田), 3: 横沢(秋田), 4: 五十瀬神社前(岩手), 5・6: 清水(岩手), 7: 湯沢(岩手),
 8: 千歳(13)(青森), 9: 花巻(青森), 10: 長者森(青森), 11: 算用師(青森), 12: 一本松(青森)

0 1:4 10cm

第5図 東北地方北部の中期末葉の土偶

餅ノ沢遺跡(太田原・野村2000)出土の土偶は、頭頂部が丸く突出する特徴的な頭部形態を有し、縦・横の貫通孔が交差する(12)。これらは大木10式期の土偶に類似するものの、正中線が幅広沈線で表現される点や突出する頭部形態は他地域に見られない特色である。帰属時期は不確定で、中期末葉に位置づけられる場合と後期初頭に位置づけられる場合があり、共伴資料などからの検討が必要である。

秋田・岩手・青森3県の中期末葉の土偶は、地域差があるものの、ほぼ刺突列文様を施す無脚土偶で共通している。秋田県本道端遺跡出土土偶のように正中線のところに描かれる連結幾何学文は、山形県の山形西高敷地内遺跡や立泉川遺跡出土土偶(第4図12・14)や青森県算用師遺跡出土土偶(第5図11)とも共通し、大木10式期の終わりから次段階にかけて広域的に広がる可能性がある。また東西南部から中部に特徴的なY字状正中線を持たない点は、地域差として捉えられるだろう。しかし、事例が甚だ少ないことに加えて、帰属時期の問題があり、時期が明確な共伴資料からの検証が不可欠である。

4. 後期前半期における土偶形態

1) 十腰内I式期以前の土偶

この段階は、大木10式期直後から十腰内I式期以前までの時期に当たり、「前十腰内I式」(葛西1979)や「蛭沢式」(成田1981)、「上村式」(本間1987)、「牛ヶ沢(3)式・沖附(2)式・弥栄平(2)式」(成田1989)、「馬立式」(鈴木1998)、「湯舟沢A式」(鈴木2000)、「日廻岱B1段階」(榎本2005)などと呼称される時期である。これらは三段階変遷の可能性が指摘されているが、ここでは一段階としておきたい。

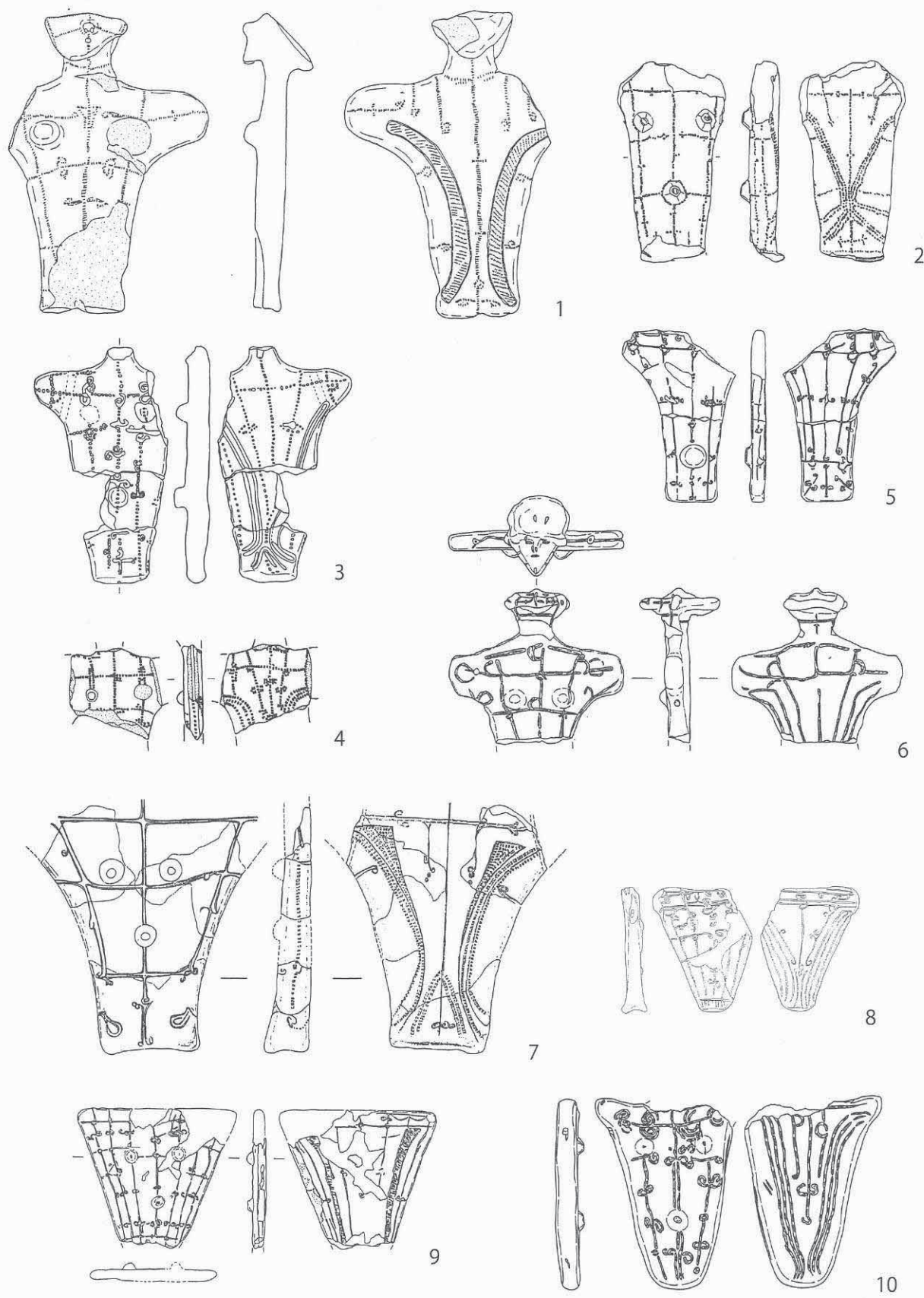
この時期の土偶は、十字形や逆三角形を呈する無脚土偶であり、自立するものはほとんどない(第6図)。文様は、体部全体に格子目状の文様が描かれるのが特徴であり、刺突列によるものと沈線によるものの二種類が確認され、時期差として捉えられている(鈴木1999b、ほか)。時期が明確な事例を中心に、これらの帰属時期について吟味する。

最初に、細かい刺突列によって格子目文を体部に施す資料は、階上町野場(5)遺跡(三浦・成田1992)第106号住居跡の覆土1層出土土偶があり、従来の研究でも後期初頭に位置づけられている(第6図1)。

覆土からは、大木10式からその直後段階の土器が出土しており、本土偶も後期初頭に帰属すると考えられる。この土偶は、連続刺突文により格子目状の文様が施され、背面には対弧状の平行沈線区画内に縄文が充填される。頭部は上半部を欠損するが、皿状に窪む後頭部を持つ。同様に、細かい刺突列によって格子目文を施す資料は、第6図2~4が挙げられる。形態的にも十字形の無脚土偶で、中期末葉までの土偶形態と共通性が高い。背面の対弧状文は、1が縄文を充填するのに対して、2~4のように二、三本の平行沈線や連続刺突列で描くものがある。これらは形態や文様において類似性が高いことから、ほぼ同時期であると理解される。

一方、沈線により体部に格子目文を描く土偶は、北秋田市桐内D遺跡(吉田ほか2001)出土資料(第6図8)が挙げられる。本土偶は、遺構に伴うものではないが、遺跡出土土器は後期初頭の「日廻岱B1段階」でまとまる傾向がある。土偶は、頭部を欠損する無脚の逆三角形の板状を呈し、沈線による格子目状文や平行沈線による対弧状文が描かれる。沈線の途中や端部にワラビ手状文が付加される。また注目すべき点は、体部下端における横位沈線区画と縦位単沈線の充填文であり、次段階の腰部の格子目文へと繋がるものと理解される。また青森市安田(2)遺跡(畠山2001)の第26号住居跡出土土偶(第6図9)は、床面よりいわゆる「沖附(2)式」(成田1989)に類似する完形土器2点が出土している。本土偶も当該期に帰属すると考えられる良好な共伴資料である。形態的には、逆三角形を呈する胴部に格子目状の沈線文がめぐり、部分的に横S字文が付加される。背面には対弧状の区画文が描かれて、区画内に沈線が充填される。この他にも文様などが類似する資料として第6図5~7・10が挙げられ、十字形もしくは逆三角形の体部に格子目状文を巡らし、その途中や端部にワラビ手文が付加される点は共通している。また背面の対弧状文は、三から四本の平行沈線で描出されるものと、沈線区角と刺突列や沈線を充填するものなど多様性がある。

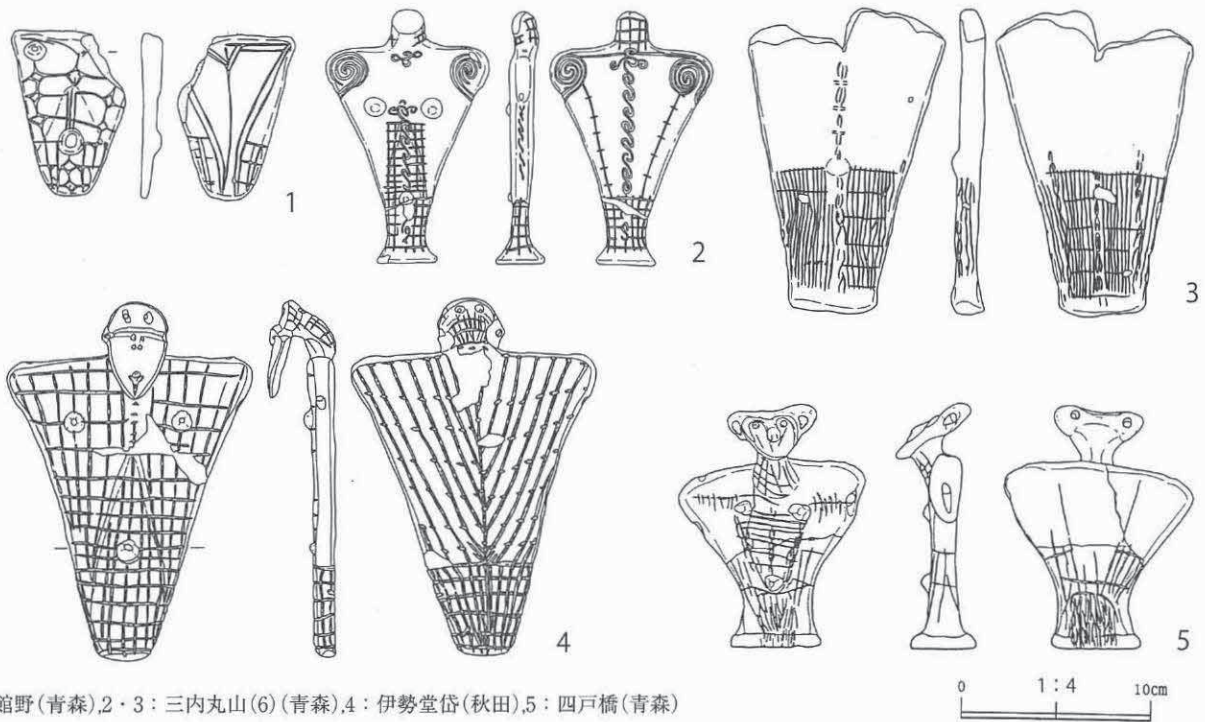
これらの格子目文の施文手法の違いは、従来言われているように時期差の可能性が高い。しかし、帰属時期が明らかな資料が極めて乏しい現状において、今後とも地域差の可能性を視野に入れて共伴資料か



1: 野場(5)(青森), 2: 秋浦Ⅱ(岩手), 3: 三内丸山(6)(青森), 4: 泉山(青森), 5: 清田台(岩手),
 6: 馬立Ⅰ(岩手), 7: 千歳(13)(青森), 8: 桐内D(秋田), 9: 安田(2)(青森), 10: 隈無(1)(青森)

0 1:4 10cm

第6図 東北地方北部の後期前葉の土偶 (1)



1: 館野(青森), 2・3: 三内丸山(6)(青森), 4: 伊勢堂岱(秋田), 5: 四戸橋(青森)

第7図 東北地方北部の後期前葉の土偶(2)

らの検討を要する。

2) 十腰内I式古段階～新段階の土偶

従来の編年研究では、十腰内I式土器は二段階に区分され、近年その直前に「小牧野3期」(児玉1999)が設定されている。ここでは榎本剛治(2008)の二細分に基づいて古段階と新段階とする。

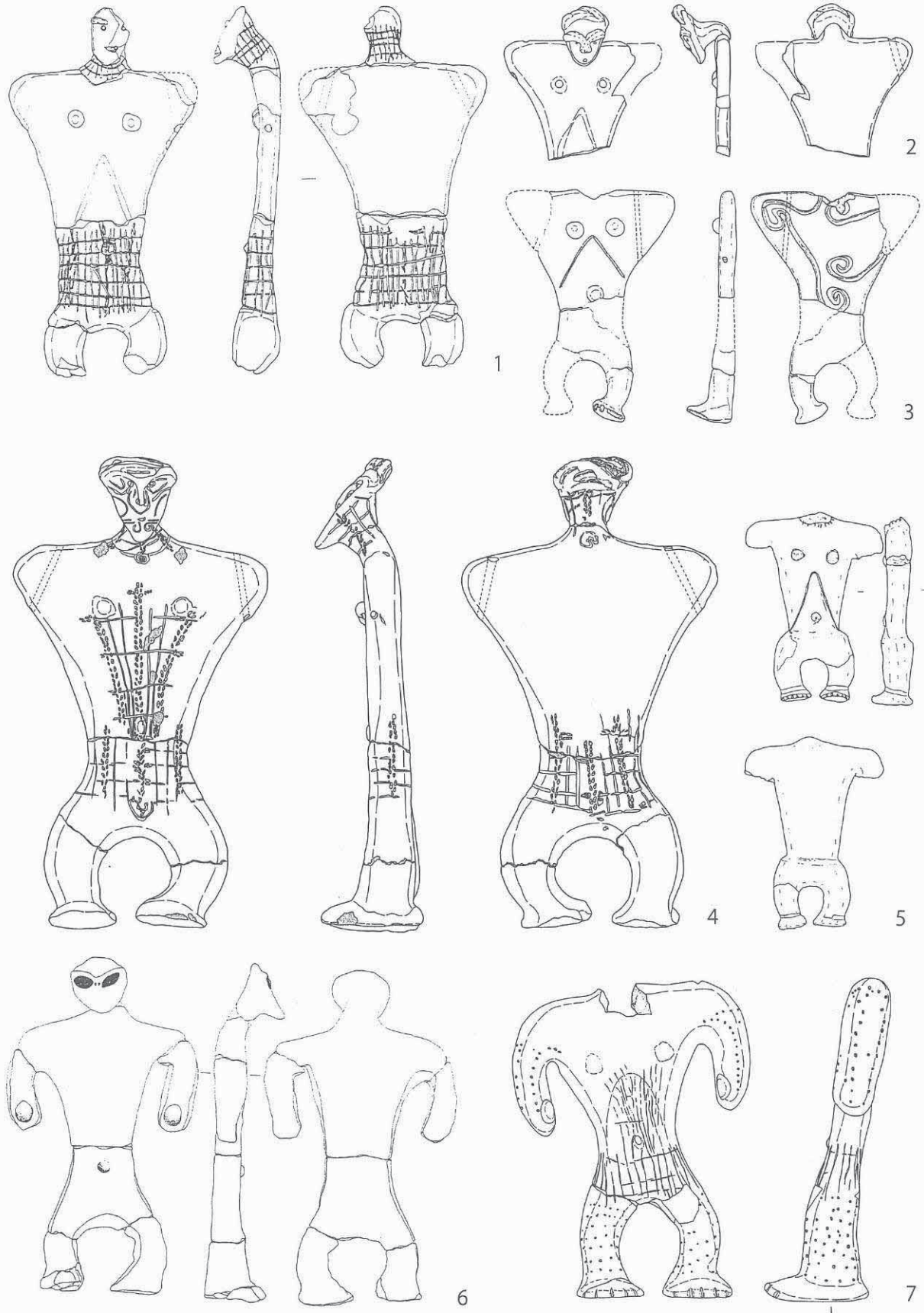
この段階の土偶は非常に薄い板状の胴部を呈し、無脚土偶の二種と有脚立像土偶・有脚有腕立像土偶の四種類が存在する。これらが時期的変化として捉えられるかが最大の焦点となる。

無脚土偶では、青森市三内丸山(6)遺跡(坂本・成田ほか2002)の出土土偶がある(第7図2・3)。2の無脚土偶⁽⁴⁾はチェスピース状を呈し、自立すると考えられる。肩部には両面に渦巻文が施されて、貫通孔を有する。これらは土器と共伴している訳ではないが、遺跡出土土器が十腰内I式でも古段階が多いことから、これらの無脚土偶が前半期に帰属する可能性が示されている(小笠原2004)。北秋田市伊勢堂岱遺跡(五十嵐1999)の出土土偶(第7図4)は、第288号土坑上層から頭部と胴部が離れた状態で出土している(播磨・小林2008)。この土坑からは、十腰内I式でも古段階の土器片が出土しており、土偶も古段階に帰属する可能性がある。

一方、有脚立像土偶では、野辺地町有戸鳥井平(4)

遺跡(瀬川2001)の大形土偶がある(第8図4)。調査者によると、土偶は腹部で二つに折れて、その上が3個体の土器によって覆われるように出土している。これらの土器のうち1個体は多条沈線によって横位長方形区角や山形文が描かれる十腰内I式でも後半期に位置づけられる土器である。

この他に土器を伴う時期の明瞭な資料は確認できないが、少なくとも無脚土偶と有脚土偶の間には従来言われているように時期差が存在すると考えられる。有脚の頸長土偶は、腕部の有無で大きく二分され、脚部や腕部は逆三角形の胴部に付属させただけのものである。文様は、前段階に比べて上半身が無文化して、鳩尾から腹部にかけての三角状の窪みに重複して格子目文が施される。背面の格子目文は腰部に限定され、第8図3のように上半身は渦巻文が施されるものもあるが、ほとんどが無文である。肩部の貫通孔は下側が外に開くように設けられ、腕部を有する小牧野遺跡の土偶(第8図7)にも見られる。しかし、有腕化とともに貫通孔が徐々に少なくなる傾向が認められる。頭部には結髪状の貼付文が出現するなど、顔部表現に変化が認められる。腕部は下に垂れて、先端部に円形の窪みを有する。脚部はO脚で、足裏が内側に反り返るものも多い。



1: 大石平(青森) 2・7: 小牧野(青森) 3: 上尾駁(2)(青森) 4: 有戸鳥井平(4)(青森),
5: 近野(青森) 6: 塚ノ下(秋田)

0 1:4 10cm

第8図 東北地方北部の後期前葉の土偶 (3)

5. 土偶有脚化の意義—地域性と地域間の影響関係—

1) 土偶有脚化のプロセス

東北地方の中期末葉の土偶は、極端な減少傾向を示す。東北地方南部では大木9式から大木10式期への大まかな形態的変遷を追うことが可能であるが、東北北部では事例が少ないことに加えて、帰属時期が明確なものが乏しい。今回取り上げた事例のほとんどは大曲1式期（大木10式並行期）に属すると考えられるが、その後の段階の土偶を含んでいる可能性がある。

また東北地方北部から南部では、文様における地域差が認められる。例えば、東北地方南部では大木9式期の土偶にはY字状正中線が特徴的に認められるが、北部では認められない要素である。背面の文様は、十字状や樹木状に沈線文・刺突文が配される点や、体部の輪郭に沿って描出される対弧状の刺突列や平行沈線文が共通する。このように、東北地方の土偶は全体的に中期末葉に低調となり、中期前半期に東北南部から中部まで広まった有脚土偶が消えて、無脚化するという大きな流れがある。このことから、単純に有脚立像土偶の定着が他地域よりも遅れたというも、複雑な土偶形態の動態が窺われる。

東北地方の土偶は後期前葉に至って再び隆盛し、東北地方南部から北関東地域にかけてハート形土偶が広がる。後期前葉のハート形土偶の成立について、上野修一（1990）は宮城県大梁川遺跡出土の中期末葉の板状土偶の系譜を引くもので、この時期の土偶の普及現象は、称名寺式土器群の後退とともに、網取式の急速な進出が認められる土器群の動態と一致し、その出現地を暗に示唆している可能性を指摘する。また上野（1997）は、「向田A・第2系列」を祖形としてハート形土偶の各系列が出現し、「向田A・第2系列」と「西方前系列」は、文様要素において東北地方北部と関連が深い一群であると指摘する。しかし、ハート形土偶の特徴の一つは後頭部の橋状把手であり、福島県域の金田遺跡や越田和遺跡出土の後頭部に把手を持つ土偶の存在はハート形土偶の成立と密接に関連していると考えられる。

一方、東北地方北部の後期土偶は、前節で概観したように、中期末葉の十字形土偶の要素を引き継ぎながら成立すると考えられる（第9図）。これは中

期末葉における無脚の土偶形態や、背面の樹木状文や対弧状の文様からの系譜とともに、肩部の貫通孔の存在からも首肯される（第9図1～5）。

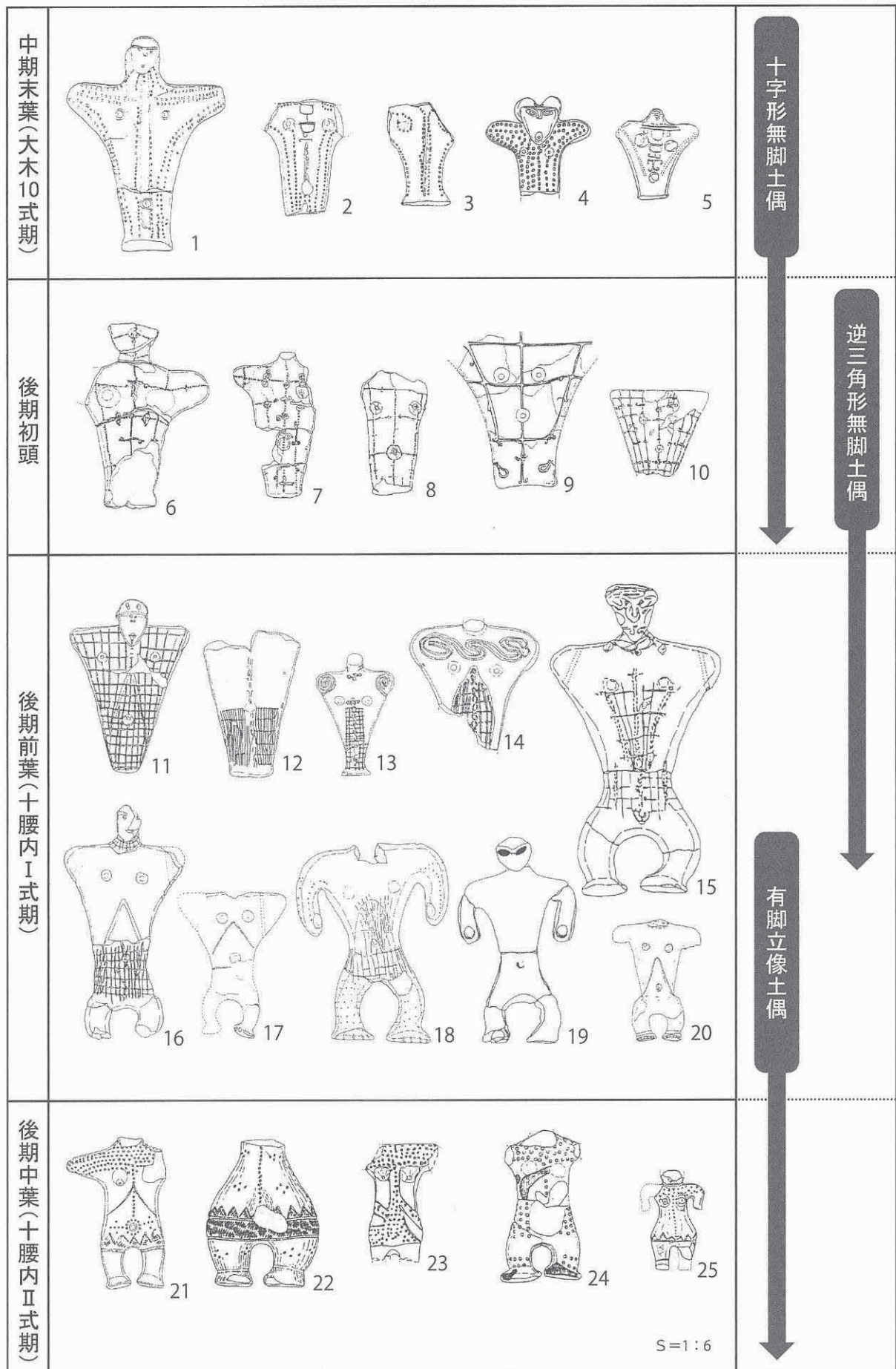
後期初頭では、体部全体に格子目状文を描くようになり、刺突列から沈線施文へと変化する可能性が高い。形態的には、以前として自立不可能な無脚土偶であるが、十字形から逆三角形を呈するようになる（第9図6～10）。また、本段階も土偶肩部に貫通孔を持つものが多く、下方がやや外側に開くように穿たれる。

後期前葉（十腰内I式期）では、三角形の体部に格子目状の沈線文を施すものが多く、鳩尾から腹部にかけて三角形の窪みが出現する（第9図11～20）。この三角形の窪みや下腹部に格子目状沈線文が施されて、上半身が無文になるものが多くなる。この段階は少なくとも二段階の変遷が想定され、12～14のような無脚土偶から16～20のような有脚土偶へと変遷すると考えられる。しかし、現状では腕部に関して時間差は確認できない。肩部の貫通孔は、前段階と同様に多くの土偶で確認される。脚部は、胴部にそのまま接合する手法を取り、それによって土偶自体の規模がより大きさを増している。髪結状の頭部装飾は後期中葉へと引き継がれる重要な装飾であり、十腰内I式の後半に出現する可能性がある。

後期中葉（十腰内II式期）では、有脚・有腕の土偶が定着するが、それまでの土偶型式が変異する段階である（第9図21～26）。形態的には、逆三角形の体部は見られず、腹部の窪みもなくなって膨らみを持つようになる。腕部の先端が外側に反り返るのが特徴である。文様は、刺突文による装飾と腰部に三角形もしくは鋸歯状の沈線文が特徴的にめぐる。21のように腹部にハ字状の沈線文が描かれるものがあり、前段階の三角形の窪みの名残であると推測される。この段階は、屈折像土偶が出現して広域的に普及するなど、土偶形式の分化も認められる。

2) 土偶有脚化の意義

東北地方北部における土偶有脚化については、以前よりハート形土偶の影響が指摘されてきた。一方で、中村良幸（1995）は、滝沢村けやきの平岡地遺跡の後期初頭の人体文土器を取り上げて、「この時期の縄文人の意識にあった人体的な造形を、より正確に表現しようとする流れの中から発生した」こと



第9図 東北地方北部の中期末葉から後期前葉の土偶形態変遷

を主張する。また中村（2008）は、四肢土偶の受容契機は不明としながらも、「板状形からの脱却こそが、一端は衰えかけた本地域の土偶を復活させ、爆発的な増加につながった」ことを指摘する。確かに中期終末から後期初頭における人体文土器も重要であるが、有脚土偶が普及する十腰内Ⅰ式後半期には人体文土器はほとんど見られなくなり、時間的前後関係に矛盾がある。やはり、ハート形土偶との影響関係の方がより重要であると考えられる。ハート形土偶は、第10図1（『土偶とその情報』研究会1995）のように東関東地方から福島県を中心として、北は山形・宮城にまで及ぶ。さらには岩手県南部の一関市清水遺跡や宮古市館山貝塚でもハート形土偶が出土し、十腰内Ⅰ式期の土偶との折衷型も確認される。これ以降、後期中葉の東北地方北部における土偶型式は、東北地方南部まで広がる山形土偶と共通性の高い土偶型式へと変化する（第9図21～25）。これは葛西（1986）が指摘するように、広域化する加曾利B1式土器の動態とも関連するものであり、東北地方北部で十腰内Ⅱ式期以降に注口土器が普及することとも連動性が認められる。このような地域間の影響関係の流れは、単なる土偶形態の変化に留まらず、文化的・社会的変化を伴っていた可能性がある。土偶形態の変化は安置方法や用途などの変異を

伴っていた事が予想されるが、後期前葉の有脚立像土偶は、短足で足裏が内側に内湾しているため自立しない事例が多い。それ以前の無脚土偶でもチェスピースのように自立するものが存在することからも、当初は自立させるために有脚化したとは言い切れない。さらに、「故意破壊説」の観点からは、それほど脚部・腕部の欠損が多くないことから、破壊するためだけに腕部や脚部を付けたとも考えにくい。

3) 土偶肩部の貫通孔から

中期末葉以降に認められる土偶肩部の貫通孔は、使用（安置）方法を考える上で非常に重要である。この貫通孔は、紐を通して懸垂するための穴であると考えられており（江坂1966、今井・磯崎1969、鈴木1981、小野美1984、葛西1986ほか）、壁や樹木・柱などに掛けられていたと推測されている。一方、貫通孔が無いものや途中で穴が塞がる事例の存在などから否定的な見解もある。十腰内Ⅰ式期の土偶肩部の貫通孔が装飾や観念的なものではなく、実用的な孔であるとするならば、幾つかの可能性が想定される。

一つは、土偶を自立させるために棒状の支えを通す穴である可能性である（第11図1）。この場合、土偶製作に伴うものと、使用（安置）のための穴である可能性が想定される。少なからず、この時期の



第10図 縄文時代後期各種土偶の分布図（『土偶とその情報』研究会1995より転載）

土偶の中には自立するものも存在し、製作時もしくは使用（安置）時に地面か台の上に立てることが意識されていたことが窺われる。

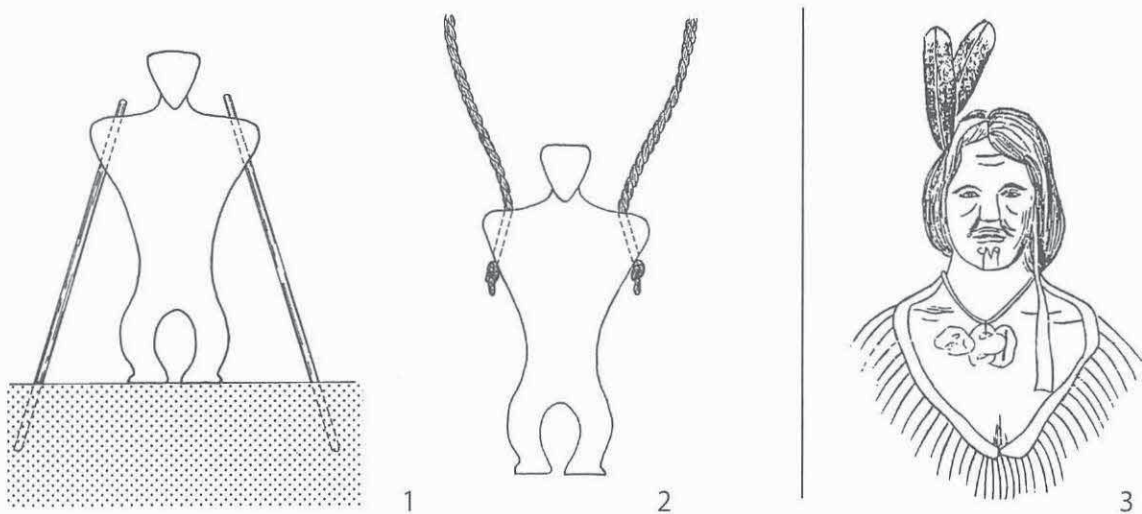
二つ目は、紐で懸垂するための穴である可能性である（第11図2）。古くは、白井光太郎（1886）が、オーストラリアの原住民の事例（第11図3）を引用して、亀ヶ岡などから出土した土偶について、装飾であり護身牌を兼ねるものであると解釈している。民族事例から単純に類推することは、現在の考古学研究において正しい解釈法とは言えないが、重要な指摘であると評価できる。実際に、当該期の土偶肩部の貫通孔に明確な紐ずれ痕は確認できないが、貫通孔の部分で片側が欠損する事例が目立つ（第6図3・4・7～10、第7図1、第8図1～3）。これらは貫通孔があるために他の部分よりも脆弱なことに起因するとも考えられるが、紐で懸垂されたことで貫通孔やその周辺への加重のために破損した可能性が高い。

紐で吊るす場合、人に帰属する「携帯型」と堅穴住居などの施設に帰属する「安置（固定）型」の存在が想定される。金子昭彦（2008）は、土偶の用途を考慮して形式分類を試み、携帯式、安置式、（吊り下げ式）、寝かせ式の区分を提唱し、板状土偶は携帯式で、自立できるものは安置式であるとする重要な指摘をしている。また金子は、当該期の土偶について、「肩に貫通孔が認められる土偶で、紐を通して介助すれば立たせることが可能であり」、「寝かせ式は、「脚があるのに立てない」もので、多くの土偶がこれに当てはまる」と重要な指摘をしてい

る。しかし、当該期の土偶に関しては、脚付きでも自立できないものは肩部に貫通孔を持つものが多く、寝かせ式という解釈にはやや疑問が残る。

これらは出土状況から検証することも可能であるが、使用状況を示すような良好な遺構出土例は極めて稀である。例えば、墓坑内から完形で出土する事例があれば、人が首などから吊るして携帯していた可能性も高まるが、今のところ皆無である。また堅穴住居などの建物での安置を示すような事例としては、堅穴住居跡の床面出土土偶が幾つかある。当該期の事例では、青森市安田(2)遺跡（畠山2001）第26号住居跡があるが、土偶の出土位置が堅穴住居のどの場所（奥壁部や入口部など）かは明らかではない。やや新しい時期の事例では、八戸市風張(1)遺跡（藤田1991）第15号住居跡の事例がある。この事例は、堅穴住居の奥壁より屈折像土偶が出土する非常に良好な事例であり、土偶の安置場所を示している可能性がある。しかし、屈折像土偶といった形式の異なる土偶であるため、堅穴住居奥壁部に安置されていたと理解することもでき、土偶全般に当てはめるのは現時点では難しい。

現状での見通しとしては、東北地方北部の後期前葉土偶は、紐で吊るして人が携帯していた可能性が想定され、屈折像土偶は有脚化するなかで大形土偶が形式分化して、屋内奥壁部に安置されるような「安置型」土偶が出現することが推測される。中期末葉から後期前葉の土製品には、斧形土製品や鐸形土製品・靴形土製品、手足形付土版など端部に貫通孔を



1：復原案① 2：復原案② 3：オーストラリア原住民（白井1886）

第11図 土偶の使用法想定図

有する懸垂系の土製品が多いことから、土偶の一部も紐で吊るされていた蓋然性が高い。加えて、この時期になると土偶顔面が、やや斜め上方を向くものが多くなる点も、使用方法と密接に関連していると思われる。これらの貫通孔を中心とする用法に関しては、破損や出土状況のみならず、実験考古学的に土偶を製作して検証してみる必要があり、今後の課題としたい。

6. まとめ

従来の土偶研究で指摘されているように、土偶の消長は単純なものではなく、一つの地域のなかでも盛衰が見られ、ある地域では土偶が一時的に消滅する時期が存在する。このような土偶の消長のなかで、形態的变化、特に有脚化は大きな画期として理解される。中部高地では中期初頭ごろ⁽⁵⁾に有脚化して広がるが、東北地方北部は後期前葉になって初めて有脚立像土偶が定着する。それ以前は、円筒上層式に伴う十字形土偶が発達していたが、中期末葉には土偶が急激に減少する。これは東日本一帯に及ぶ現象であるが、東北地方では在地的複式炉（前庭部付石組炉）が発達して住居や集落の数が増大する動態（阿部2008）と相反している。それが後期に至って、再び土偶が発達するプロセスと背景は、この時期の社会的変化や儀礼の発達と複雑化を背景とすると考えられ、これは同時期の「第二の道具」の増加と多様化に垣間見ることができる。

東北地方北部における後期前葉の土偶の有脚化は、南からのハート形土偶の影響によるものと考えられ、これらは他の物質文化の動態とも連動性が認められる。土偶有脚化は、当初は単なる形態変化にすぎなかったかもしれないが、その後の土偶の大形化（形式分化）や使用（安置）方法にまで変化が及んだ可能性がある。このことは、後期中葉以降に有脚立像土偶の肩部貫通孔が消えるといった形態的变化におけるタイムラグに認められる。これらの形態変化の流れが新たな土偶形式である屈折像土偶を生み出した可能性がある。

現段階では、中期末葉から後期前葉までの肩部貫通孔を持つ土偶は、竪穴住居奥壁部や人が首などに懸垂していたと理解しておきたい。しかしながら、これらは出土資料の詳細な観察と実験考古学的な検

証が不可欠であるとともに、今後の良好な出土事例に期待したい。

最後に、土偶の名称やタイプ名なども、土偶研究者が増加した現在、共通認識を持って使用できる名称の設定はより難しくなっており、むやみにタイプ名を乱立させるよりも、まずは体系立った土偶研究法の整備が必要であると感じる。因みに十腰内I式期の土偶は、現状では「頸長土偶」もしくは「頸長板状土偶」などと呼称するのが妥当かと思う。

本論は、國學院大學伝統文化リサーチセンターにおける「祭祀遺跡に見るモノと心」グループの東北地方北部の資料調査の成果を中心にまとめたものである。論文内容に関して、國學院大學の小林達雄先生とともに谷口康浩先生にはご多忙なかご指導を頂いた。また資料調査や論文作成において、以下の方々ならびに機関よりご協力とご指導頂いた。文末ながら感謝申し上げたい（敬称略：50音順）。

朝倉一貴 井上雅孝 内川隆志 榎本剛治
大久保学 小笠原善範 加藤里美 加藤元康
川口 潤 小久保拓也 児玉大成 佐々木務
佐々木雅裕 佐藤雅一 設楽政健 白鳥文雄
杉野森淳子 成田滋彦 藤井安正 細田昌史
青森県埋蔵文化財調査センター
青森市教育委員会
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
鹿角市教育委員会 北秋田市教育委員会
滝沢村埋蔵文化財センター 十和田市教育委員会
八戸市博物館 八戸市教育委員会

註釈

- (1) 岩手県南部や宮城県域で、十腰内I式に伴う土偶の文様を施すハート形土偶片が認められる。このような事例は、在地の土偶のなかに北方の土偶文様が入り入れられたものと考えられる。
- (2) 土偶の帰属時期は、石器や土製品・石製品と同様に、まずは伴う土器型式から判別するのが適切であると考えられる。しかし、土偶の良好な遺構出土資料は稀で、遺構出土資料であっても伴う土器と同時期と判断できる例は極めて少ないのが現状である。
- (3) 縄文時代の後期の定義は、関東地方の称名寺I式土器の成立からである。大木10式土器は少なくとも新段階には並行関係にあり、中段階に及ぶ可能性が指摘されている。しかし、本論では、便宜的に大木10式期ま

でを中期としておきたい。

- (4) この三内丸山(6)遺跡の出土土偶は、昨年資料調査した際に偶然接合した資料であり、青森県埋蔵文化財調査センターのご厚意で、再実測させていただいた資料である。
- (5) 有脚立像土偶に関しては、櫛原功一(1998)や今福利恵(2000)らにより、すでに前期黒浜並行期に各地に散見されることが指摘されている。しかし、中期初頭以降に安定的に普及する有脚立像土偶へのつながりはやや不明瞭である。

引用・参考文献

- 阿部昭典 2007 「新潟県下越地方の縄文中期終末から後期初頭の諸様相」『第20回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』 271~336頁 縄文セミナーの会
- 阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』 未完成考古学叢書6 アム・プロモーション
- 阿部昭典 2009 「東北北部における『第二の道具』の多様化—土製品・石製品のライフサイクルから—」『平成21年度フォーラム環状列石をめぐるマツリと景観 発表資料集』 1~12頁 國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 阿部明彦 1994 「山形の土偶」『東北・北海道の土偶Ⅰ』土偶シンポジウム2秋田大会資料 279~326頁
- 伊藤玄三・八巻正文 1968 「福島市月崎出土の土偶」『考古学雑誌』第53巻第4号 30~44頁
- 稲野裕介・金子昭彦・熊谷常正・中村良幸 1992 「岩手県の土偶—縄文時代後・晩期を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 100~111頁
- 今福利恵 2000 「中部地方の初期立像土偶の成立と展開」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(4)』 63~113頁 勉誠社
- 岩崎義信 2009 『第13回企画展 土偶展』長井市古代の丘資料館
- 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について—東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐる—」『埼玉考古』第27号 27~76頁
- 上野修一 1990 「ハート形土偶」『季刊考古学』第30号 28~29頁
- 上野修一 1995 「ハート形土偶の系譜とその周辺」『関東地方後期の土偶(山形土偶の終焉まで)』土偶シンポジウム・3 栃木大会シンポジウム発表要旨 29~32頁
- 上野修一 1997 「東北地方南部における縄文時代中期後葉から後期初頭の土偶について—ハート形土偶出現までの緒様相—」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(1)』 73~98頁 勉誠社
- 江坂輝彌 1952 「青森県田名部町最花出土の土偶」『貝塚』第42号 1~2頁
- 江坂輝彌 1960 『土偶』校倉書房
- 江坂輝彌 1966 「円筒式土器に伴う土偶」『考古学雑誌』第51巻第4号 1~11頁
- 榎本剛治 2005 「秋田県における湯舟沢A式土器の検討」『北奥の考古学』 137~148頁
- 榎本剛治 2008 「十腰内Ⅰ式土器」『総覧縄文土器』530~535頁 アム・プロモーション
- 小笠原雅行 2005 「三内丸山(6)遺跡の土偶—十腰内Ⅰ式前半期の土偶—」『北奥の考古学』 287~301頁 葛西勳先生還暦記念論文集刊行会
- 大河原勉 2007 「狩猟文を持つ土偶について」『研究紀要2006』 91~100頁 福島県文化振興事業団
- 大野雲外 1910 「土偶の形式分類に就て」『東京人類学会雑誌』第296号 54~60頁
- 小野正文 1990 「土偶大量保有の遺跡」『季刊考古学』第30号 68~71頁
- 小野美代子 1981 「加曾利B式期の土偶について」『土曜考古』第4号 1~6頁
- 小野美代子 1984 『土偶の知識』東京美術
- 押山雄三・日塔とも子 1995 「鴨打A・割田A・向田A遺跡の中期後葉~後期前葉の土偶」『関東地方後期の土偶(山形土偶の終焉まで)』土偶シンポジウム3 栃木大会シンポジウム発表要旨 86~89頁
- 葛西 勳 1979 「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号 1~9頁
- 葛西 勳 1986 「十腰内Ⅰ式土器に伴う土偶について」『撚糸文』第14号 1~16頁
- 金子昭彦 1996 「十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方」『岩手考古学』第8号 41~60頁
- 金子昭彦 2008 「土偶破壊説の再検討—遠距離接合を中心に—」『第5回土偶研究会発表資料』67~76頁 土偶研究会
- 櫛原功一 1998 「山梨県の縄文時代中期土偶—有脚立像土偶の出現をめぐる—」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(2)』 61~86頁 勉誠社
- 熊谷常正・中村良幸・稲野裕介・金子昭彦 1994 「岩手の土偶」『東北・北海道の土偶Ⅰ』土偶シンポジウム2 秋田大会資料 75~164頁
- 熊谷常正 1997 「岩手県の土偶—その発現期から遮光器土偶成立前夜まで—」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(1)』 411~428頁 勉誠社
- 児玉大成 1999 「小牧野遺跡における環状列石の「構築時期」」『青森県考古学』第11号 15~32頁
- 小林達雄 1977 「縄文世界のなかの土偶—第二の道具」『土偶・埴輪 日本陶磁全集3』 45~52頁 中央公論社
- 斎藤直巳 1985 「北上川流域の土偶について」『日高見国』 109~145頁 菊池啓治郎学兄還暦記念会
- 白井光太郎 1886 「貝塚より出でし土偶の考」『人類学会報告』第一巻第二号 26~29頁
- 鈴木克彦 1981 「土偶の研究序説—風韻堂コレクション資料編—」『青森県立郷土館調査研究年報』第6号 65~103頁
- 鈴木克彦 1992 「青森県の土偶—その基礎的研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 71~98頁
- 鈴木克彦 1994 「青森の土偶」『東北・北海道の土偶Ⅰ』土偶シンポジウム2 秋田大会資料 23~74頁
- 鈴木克彦 1999a 「大木系(土器)文化の土偶の研究—土

- 偶の研究(3)-』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』95~122頁 勉誠社
- 鈴木克彦 1999b 「十腰内文化の土偶の研究-土偶の研究(4)-』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』143~168頁 勉誠社
- 鈴木克彦 2000 「岩手、秋田県北部の後期初頭土器の編年-湯舟沢A式の設定と提唱』『岩手考古学』12号 1~21頁
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木正博 1990 「縄紋式遺蹟系列に於ける階層的網状組織と高井東遺蹟の土偶』『土曜考古』第15号 1~10頁
- 谷川磐雄 1923 「石器時代宗教思想の一端(二)』『考古学雑誌』第13巻第5号 27~35頁
- 谷口康浩 1990 「土偶のこわれ方』『季刊考古学』第30号 63~67頁
- 富樫泰時・武藤祐浩 1992 「秋田県の土偶』『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 136~153頁
- 富樫泰時 1994 「秋田の土偶』『東北・北海道の土偶Ⅰ』土偶シンポジウム2秋田大会資料 223~278頁
- 『土偶とその情報』研究会 1995 『土偶シンポジウム3栃木大会 関東地方後期の土偶-山形土偶の終焉まで-』
- 角田 学 1995 「福島県会津地方出土の土偶について』『みちのく発掘-菅原文也先生還暦記念論集-』129~169頁
- 鳥居龍蔵 1922 「日本石器時代民衆の女神信仰』『人類学雑誌』第37巻第11号 371~383頁
- 永峯光一 1977 「呪的形象としての土偶』『日本原始美術大系3 土偶 埴輪』155~171頁 講談社
- 中村良幸 1995 「北上川流域における縄文後期土偶の変遷』『早池峰文化』8号 16~37頁 大迫町教育委員会
- 中村良幸 1999 「東北地方北部の後期前半土偶-板状形からの脱却-』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』169~197頁 勉誠社
- 中村良幸 2008 「土器文様と土偶文様』『総覧縄文土器』1201~1204頁 アム・プロモーション
- 成田滋彦 1981 「青森県の土器』『縄文文化の研究4』123~131頁 雄山閣
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式』『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』277~280頁 小学館
- 成田滋彦 1997 「深浦町一本松遺蹟の土偶』『青森県史研究』第1号 27~30頁
- 成田滋彦 1999 「目立たない土偶-第Ⅰ章-』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』123~141頁 勉誠社
- 成田滋彦 2002a 「目立たない土偶-第Ⅲ章-遺構内出土の土偶を考える-』『青森県考古学』第13号 15~39頁
- 成田滋彦 2002b 「土偶の製作』『研究紀要』第7号 青森県埋蔵文化財調査センター 15~28頁
- 成田滋彦 2002c 「大型土偶の分割について』『海と考古学とロマン』121~131頁 市川金丸先生古稀を祝う会
- 成田滋彦 2007 「十腰内文化概説』『三浦圭介氏華甲記念論集』27~54頁 三浦圭介氏華甲記念論集刊行委員会
- 成田滋彦 2008 「北上川流域における十腰内土偶』『第5回土偶研究会』55~66頁 土偶研究会
- 浜野美代子 1997 「東北地方南部における山形土偶-東北南部後期中葉から後葉にかけての土偶-』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(1)』149~168頁 勉誠社
- 原田昌幸 2009 「土偶祭祀構造』『季刊考古学』第107号 23~26頁
- 播磨芳紀・小林 克 2008 「能代市杉沢台遺蹟の土坑埋納土偶-遺体変形と土偶祭祀-』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第22号 30~45頁
- 藤沼邦彦 1992 「宮城県の土偶』『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 112~135頁
- 本間 宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)』『よねしろ考古』第3号 31~50頁
- 本間 宏 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)』『よねしろ考古』第4号 71~84頁
- 山内幹夫 1992 「福島県の土偶』『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 154~174頁
- 山口 晋 1999 「福島県の後期土偶』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(3)』199~229頁 勉誠社
- 米田耕之助 1984 『土偶』ニューサイエンス社
- 渡辺 仁 2001 『縄文土偶と女神信仰』同成社
- 発掘調査報告書**
- 西戸純一・新井達哉ほか 2003 『和台遺跡』飯野町教育委員会
- 金崎佳生・鈴木雄三ほか 1982 『河内下郷遺跡群Ⅱ 仁井町遺跡 上納豆内遺跡』郡山市教育委員会
- 福島雅儀 1985 『小田口D遺跡』福島県文化センター
- 福島雅儀 1991 『仲平遺跡(第3次)』福島県文化センター
- 松本 茂・山岸英夫ほか 1991 『法正尻遺跡』福島県文化センター
- 大河原勉ほか 2003 『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 高木・北ノ脇遺跡』福島県文化振興事業団
- 佐藤庄一・佐藤正俊ほか 1992 『山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書』山形教育委員会
- 斉藤 守 1994 『蕨台遺跡』山形県教育委員会
- 氏家信行・志田純子 1998 『山居遺跡』山形県埋蔵文化財センター
- 佐竹桂一ほか 2002 『中川原C遺跡 立泉川遺跡』山形県埋蔵文化財センター
- 後藤勝彦ほか 1978 『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ上 深沢遺跡』宮城県教育委員会
- 相原純一ほか 1988 『大梁川遺跡・小梁川遺跡』宮城県教育委員会
- 小畑 巖・桜田 隆 1988 『袖ノ沢遺跡・横沢遺跡』秋田県教育委員会
- 秋元信夫ほか 1984 『天戸森遺跡』鹿角市教育委員会
- 田村 栄・本間 宏 1986 『本道端遺跡発掘調査報告書』比内町教育委員会

- 富樫泰時・田村 栄 1979 『塚の下遺跡発掘調査報告書』
秋田県教育委員会
- 高橋 学・五十嵐一治 1995 『家の下遺跡(1)』秋田県
教育委員会
- 牧野賢美・吉田英亮 2001 『桐内B遺跡 桐内D遺跡』秋
田県教育委員会
- 五十嵐一治 1999 『伊勢堂岱遺跡』秋田県教育委員会
- 高田和徳ほか 2006 『大平遺跡』一戸町教育委員会
- 菅原弘太郎 1979 『五十瀬神社前遺跡』岩手県教育委員
会
- 三浦謙一 1983 『湯沢遺跡』岩手県埋蔵文化財センター
佐々木琢・鈴木浩二 2000 『秋浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村上 拓 2002 『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化
振興事業団埋蔵文化財センター
- 小原真一 2003 『清田台遺跡発掘調査報告書』岩手県文
化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三浦圭介・成田滋彦ほか 1975 『近野遺跡発掘調査報告
書(Ⅱ)』青森県教育委員会
- 高橋 潤・畠山 昇ほか 1976 『千歳遺跡(13)』青森県
教育委員会
- 杉山 武・成田滋彦 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)
三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 成田滋彦 1983 『長者森遺跡』青森県教育委員会
- 北林八洲晴・成田滋彦ほか 1985 『大石平遺跡』青森県
教育委員会
- 遠藤正夫・白鳥文男・三浦圭介ほか 1988 『上尾駁(2)
遺跡Ⅱ』青森県教育委員会
- 白鳥文雄・石戸谷悟ほか 1989 『館野遺跡』青森県教育
委員会
- 三浦孝仁・成田 悟 1992 『野場(5)遺跡』青森県教育委
員会
- 成田滋彦・相馬信吉ほか 2000 『三内丸山(6)遺跡Ⅱ』青
森県教育委員会
- 太田原潤・野村信生 2000 『餅ノ沢遺跡』青森県教育委
員会
- 畠山 昇 2001 『安田(2)遺跡Ⅱ』青森県教育委員会
- 坂本真弓・成田滋彦・小笠原雅行ほか 2002 『三内丸山
(6)遺跡Ⅳ』青森県教育委員会
- 工藤 大・木村 高ほか 1998 『隈無(1)遺跡・隈無(2)
遺跡・隈無(6)遺跡』青森県教育委員会
- 塩谷隆正・小笠原幸範ほか 1983 『四戸橋遺跡』青森市
教育委員会
- 上野隆博・児玉大成ほか 1996 『小牧野遺跡発掘調査報
告書』青森市教育委員会
- 瀬川 滋 2001 『向田(24)遺跡・有戸鳥井平(4)遺跡・有
戸鳥井平(5)遺跡』野辺地町教育委員会
- 藤田亮一ほか 1991 『風張(1)遺跡』八戸市教育委員会
- 今井富士雄・磯崎正彦 1969 『第16節 十腰内遺跡』『岩
木山』弘前市教育委員会
- 新谷雄蔵・桜井有一ほか 1980 『深浦町一本松遺跡(第
二次発掘調査報告書)』深浦町教育委員会
- 田原良信 1999 『石倉貝塚』函館市教育委員会